

科学と人のアートによって醸成される、一人ひとりの自律に基づく死生観に裏打ちされた超高齢社会

Science and Humanity for Fostering a Super-aged Society that Respects Individual's Views on Life and Death and Their Autonomy

研究代表者 山川みやえ(医学系研究科 准教授)

研究協力者

[学内] 土岐博(核物理研究センター 名誉教授) 鈴木徑一郎(社会技術共創研究センター 特任助教) 木多道宏(工学研究科 教授) 杉田美和(工学研究科 特任准教授) 佐藤眞一(人間科学研究科 名誉教授) 吉田美里(医学系研究科老年看護学研究室 特任研究員) 瀬戸ひろえ(人間科学研究科行動統計科学研究室 博士後期課程) 高井悠花(医学研究科保健学専攻 博士前期課程)

[学外] 勝眞久美子(なな-る訪問看護ステーション 管理者) 鎌田大啓(株式会社TRAPE 代表取締役社長)

河上崇陽(Code for Osaka 理事、株式会社グルメ軒屋Chief digital officer) 庄瀬寛(一般社団法人シニアライフ協会) 宮崎宏典(NPO法人いぬいぶる 理事長)

福村雄一(東大阪プロジェクト 代表、司法書士法人山西福村事務所) 瀧澤一寛(一般社団法人シニアライフ協会)

共同研究機関・連携機関

吹田市(福祉部・健康医療部) 豊中市(福祉部) 箕面市(健康福祉部) 社会福祉法人大阪府社会福祉事業団 東大阪プロジェクト 公益財団法人浅香山病院

NTT PARAVITA 日本電気株式会社 (NEC Corporation) パナソニック株式会社 Amame Associate Japan株式会社

1. プロジェクトの概要

このプロジェクトにおいて、「自律」とは個人がコミュニティの資源を利用し、最期まで自分の意思を表現することを意味します。超高齢社会における人々の生活に焦点を当て、個々人が人生を「アート」としてデザインし、様々な問題に対して納得のいく解決策を見出すことを目指しています。これは、人間性と科学の融合によって実現されることを目的としています。

2. 今年の活動

①「いのち」を大切に作る議論の場を創る

終末期ケアについての座談会や、経済学の理論の変遷を学習するための「いのち」のフォーラムを実施し、両方とも定員を上回る参加者でした。詳細はマンスリートピック(本レポート pp. 88-89)を参照。

②個の尊厳を高める終末期ケア

ホスピスの第一人者である柏木哲夫先生との座談会を「暮らす看護ホスピスもかの家」で開催しました。また、NECとの共同研究の成果を3月にプレスリリースし、8月にはタイで開催されたモンテッソーリ世界大会での発表も行いました。欧州のスマートシティ視察から得た知見を、今後の介護のデジタル化に活かす予定です。

③介護の生産性向上の人材育成

メンバーの鎌田氏が率いるTRAPEが、2017年から厚生労働省と共に介護事業所の新たな可能性

を探索しています。オンラインサービス「ソシウェル(https://trape.jp/sociwell/)」を活用し、職員のワークエンゲージメントを向上させ、介護の新たな価値を創出する取り組みを進めております。

④地域コミュニティの活性化

近隣センターを再生するために、新千里南町近隣センターの空き室において、木多研究室の学生が親子を対象とした内装づくりのワークショップを実施し、青山台近隣センターでは、建築工学コースの学生が地域のハブとなる建築の設計を行い模型を出展しました。また、関西における4つの複合型支援施設を調査し、精神障がい、子ども、外国人など支援分野の領域を越えた場づくりのあり方を考察しました。

⑤公共図書館での地域共生

アルツハイマー病研究会や日本認知症学会での講演、老年精神医学雑誌への2編の特集記事の寄稿、吹田市

健都ライブラリーでの大学院生による健康相談会の共催を行いました。また、本学の歴史研究者と協力し、オーラルヒストリーに関する新たな活動も始めています。

⑥高齢者の自己実現

2023年、コロナ時代に失われた人々の触れ合いが音楽とダンスにより戻ってきています。大阪市の介護予防教室で行われた1年間のダンス教室では、60代から80代の参加者が毎月のレッスンを通じて新たなコミュニティを築いています。2024年には地域の昭和音楽隊と共にダンスタイムを含む音楽コンサートを開催する予定です(ポスター)。

⑦医療介護の連携と地域ネットワークづくり

年4回のケアマネジャー研修と、大阪府看護協会後援のもと1回開催されるまちの保健室を通じて、地域住民へのサービスを強化しています。大阪大学のワニカフェや吹田市社会福祉協議会とのセミナー共催で、話しやすい場所づくりにも注力しています。

⑧死生観の醸成

2023年、ACPを具体的な形にする活動に注力しました。自分の意思を明らかにし、家族に伝えるための勉強会を実施し、ビデオ撮影されたインタビューで「代理権限者は誰か」「延命措置を希望するか」等の質問に答えさせました。この方法を用いて、今年も啓蒙活動とインタビュー撮影を続けます。

⑨哲学対話

豊中市では、高齢者を中心とした毎月の哲学カフェの取り組みを継続しています。また、伊丹市有岡小学校区まちづくり協議会福祉ネット会議と連携した哲学カフェでは、カフェの終了後に、高齢者やさまざまな立場の人が、老いや死などに関連したセンシティブな問題も安心して話せる探求的な対話の場の作り方について市民とともに研究するゼミナールも開始しています。

⑩高齢者デジタルデバインドへの取り組み

スマホの使用に不安や苦手意識のあるシニアが、日常の社会とのつながりの中で「ついで」に躰きを解消できるコミュニティづくりとしてたつの市主催のデジタルマイスター養成講座を開催し、34名の受講生を輩

超高齢社会のチャレンジングな変化の中で一人ひとりの人生を豊かにするために

出しました。これらの受講生が地域のシニアのスマホ使用に関する相談支援を提供しています。

⑪高齢者が安心して暮らせる地域創生

資本主義により仕事場が大都市に集中し、働き手は居住地を変えざるを得なくなっています。この結果、親子が同じ家に住むことが難しく、退職後の高齢者夫婦はしばしば家に残り残されます。団塊世代が高齢者になる現在、このような家庭が増えており、自治会が高齢者が安心して暮らせる環境を作る必要があります。地域ベースの3世代交流が求められる中、箕面市では「自治会を考える会」が活動しています(ポスターあり、総会の様子)。

3. プロジェクトの今後

これまでの活動をさらに深化・拡張し、高齢者一人ひとりが自分の人生を「アート」としてデザインし、科学と人間性の融合を通じて、より良い環境の整備を進めることも重要な柱です。満足のいく解決策を見出せるように支援することに重点を置くように、何らかの評価方法を創り出していく予定です。